

解剖学的形態のみならず人間の「感性」を磨く一冊

「天然歯の形態学2」を読んで

(医) 健志会 ミナミ歯科クリニック 主任歯科技工士
大阪セラミックトレーニングセンター非常勤講師
藤本光治 Mitsuji Fujimoto

大阪セラミックトレーニングセンター大阪校校長 脇田太裕先生の「天然歯の形態学1」の続編となる「天然歯の形態学2」が上梓された。

天然歯牙モデルの製作そして上下巻合わせて約3万枚に及ぶ写真撮影から始まり、完成までに約4年半の歳月を費やされたとある。

我々、歯科技工士にとって補綴装置を製作するための原点であり教科書である天然歯の解剖学的特徴を余すところなくわかりやすく解説されており、より自然美と機能性を備えた補綴装置を製作し患者の笑顔、幸せに貢献してほしいという著者の思い、熱意が感じられ、その労力も合わせ心より敬意を表したい。

第1巻では上下顎中切歯から第二大臼歯までの個々の天然歯牙形態の基本的な特徴・ルール及び隆線や咬頭、切縁から歯根への「流れ」、近遠心、唇頰側と舌側との対比「バランス」について分析され、とてもわかりやすく解説されていた。

第2巻ではさらに「後続歯への形態変化」をメインテーマとし上下顎6前歯の中で1歯単位での形態の流れ及び後続歯への流れを基本形態及びテーパ型・スクウェア型・オボイド型、あるいはそれらの混合タイプのパターンごとに分類し、あらゆる方向から観察、また配列による見え方の違いなどを含めて解説がなされている。前歯部天然歯列は“何故、独立感があって、美しく自然感があるのか?”の答えがより明確なルールの中に存在していることがわかる。

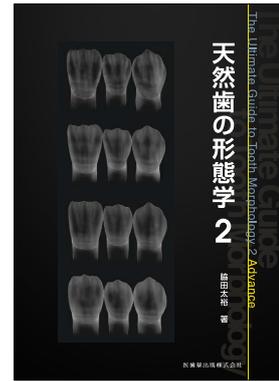
あらためて1歯単位で個々の歯の形態を再現でき、そのうえで後続歯への連続性に注目することが重要であると同

時に美しく見えるものにはすべて理由があることが理解できる。また過去の文献にもあまりなかった同一患者の6前歯において左右側での形態的特徴の違い・比較についても解説されており、筆者も興味深く拝読した。

前歯部における歯冠形態とマメロン(象牙質構造)と透明感の関係性についても非常にわかりやすく解説されており、自然感のある色調再現のためにはやはり正確な象牙質構造の再現が重要である。そのために解剖学を熟知することが審美補綴成功への近道であり、大阪セラミックトレーニングセンターが開校以来、一貫して天然歯カービングを中心に教育システムが構築されてきた所以でもあろう。

そして今後ますます需要が高まっていくことが予想されるモノリシック系(ステインテクニック)の補綴装置製作時においても、歯冠形態と象牙質・透明感の関係性を熟知しながら行うことで、より自然感のある色調再現が可能となる。そういう側面においても本書は様々なヒント・答えを与えてくれるであろう。また前歯部よりも清掃環境が不利な臼歯部についての解説では、唇舌幅の薄い前歯から頬舌幅が広がっていく臼歯部への移行形態(犬歯遠心と第一小臼歯近心)、小臼歯からさらに頬舌幅が広がっていく大白歯への移行形態が実に絶妙な流れ(連続性)を持って調和していることが示されており、臨床上大いに参考にすべきであろう。

最終章では実際の口腔内とそれらを模型に起こした状態での様々なパターンでの比較、解説の写真が掲載されており、形態の流れ・形態と色調の関係性及び表面性状についても大変参考に



脇田太裕 著
A4判カラー／408頁
定価：30,000円＋税
医歯薬出版株式会社 刊

なる。

本書は、天然歯の解剖学と後続歯への形態変化を学ぶことがメインであるが、その他の活用法として、

- ・我々歯科技工士が前歯部多数歯補綴製作時におけるイメージ作りの一助に、あるいは形態や色調再現のバリエーションを増やすための参考として
- ・前歯部修復において歯科医師を含む歯科医療従事者と患者とのコミュニケーションツールとして(前歯部の形態のイメージの提供・共有など)

も大いに活用できるだろう。

最後に、著者の巻頭(Introduction)の言葉に“審美技工において「美しい、調和、自然感」を表現することは、まさに「感性に触れる」ものである”とあるが、今後、歯科医療界ではますますデジタルテクノロジーの進化、AIの発展によりさらにその波は加速すると思われるが、我々歯科技工士は補綴装置の具備すべき条件(美しく・機能的で・生物学的恒常性が得られ・構造力学的に安定し)を満たすことに全力を尽くすことはもちろんのこと、プラスα、人間の「感性」というエッセンスが加わるにより補綴装置の価値がより高まるであろう。

筆者自身も今後ますますテクノロジー(科学)とアート(職人的感性)が融合した付加価値の高い補綴装置の製作を通して歯科医療に貢献し患者の笑顔に寄与していきたい。